稲葉默斎の「孝」に関する考察

大久保　紀子

はじめに

佐藤直方の学統を嗣ぐ儒者稲葉默斎（享保一七年〈一七三二〉―寛政一一年〈一七九九〉）は、五十歳を期に千葉の現在の大網白里町に隠遁し、その周辺の一般の人々に儒教を講じて一生を終えた。

默斎は喪礼をはじめとする儒教の礼を説くことによって、上総の人々の生活を啓蒙していこうとするが、その強い動機となっているのが「孝」という観念である。この「孝」とは、単なる徳目ではなく、また親孝行のような行為を指す言葉でもない。むしろ、そうしたものの基底にある、宗教的な要素を含む観念をいう。

儒教を厳密な意味で宗教とよぶことはできないが、儒教が宗教的な要素を含んでいることは確かである。もともと儒とはシャーマンを意味したこと、古くは人格的なものであった天への信仰があり、敬天の祭祀が後世まで残っていたこと、祖先祭祀の礼、儒教独特の死生観など儒教が宗教的な要素を含んでいることを否定することは難しい。

しかし、儒教の宗教性の内実は何かということになると論者によって十人十色である。儒教の内容そのものが多岐にわたっている上、時代や学派によって儒教の性格もさまざまで、その宗教性を一般化することは困難である。そこで、本論では、一般論として一応妥当であると考えられる加地伸行氏の宗教的「孝」の規定をたたき台として、論じていくこととする。

加地伸行氏は、「孝」の要素として、祖先祭祀、親に愛敬を尽くすこと、子孫を残すことの三つをあげ、「孝」とはこれらの三つの行為において、祖先、親、自分、子孫へと永遠に続く生命の連続を自覚することであると考える。そして、人は、個体としては死があろうとも、その生命の連続の中で子孫の形骸の中に生き続け、子孫の祭祀によってこの世に再生すると考える儒教の死生観に宗教性を見い出す。(1)

この加地氏の規定は一応妥当な規定であると考えられるが、問題がないわけではない。「生命」あるいは「再生」という現代的な用語に違和感を覚えるし、(2) また、「生命の連続」については、さらに詳しい説明が必要であろう。

さらに、一般論として加地氏の規定を認めたとしても、問題は、個々の儒者によってさまざまな「孝」があり得るということである。学派によって、時代によって、宗教的「孝」はさまざまに変容していく。本論では、その一例として稲葉默斎をとりあげ、その宗教的「孝」の具体的な様相を示す。

默斎の事例を示すことによって、近世儒教の宗教性についての従来の評価を補正することができる。従来、近世の儒教といえば、一般にその非宗教的な性格が強調されてきた。儒教の宗教性を強く主張する加地氏でさえ、江戸時代になって檀家制度が成立し「儒教から喪礼が脱落したとき、宗教性を欠いた儒学という、知識と道徳との理論になってしまうのは当然」(3) であったと述べている。加地氏は、近世の儒者は喪礼を担当することができなかったため、その儒教は宗教性を失い、知的探求だけの儒学になったと主張する。

> 江戸時代に至ると、檀家制度により仏教寺院が大方の葬儀を担当することになったため、儒教による喪礼は儒式に従う武家行政家の一部を除いてあまり行われなくなる。そのため、儒教の宗教性がしだいに見えなくなってしまってゆくこととなった。その結果、礼教性（規範性、道徳性を指す―大久保註）が儒教の中心となり、知的な探求が多くなった。つまり儒〈教〉と言うよりも儒〈学〉の気分が強くなったのである。
>
> （『儒教とは何か』、二四八頁）

一般に、近世の儒教に加地氏の述べるような傾向があることは認めざるを得ない。しかし、個々の儒者についてその思想の宗教的要素を検討していけば、もっと複雑

な多様な実態があるにちがいない。一般論として、近世の儒教は宗教性に乏しいということがいえるとしても、個々の儒者の思想の宗教的要素を具体的に明らかにしていく作業が必要であろう。それを、黙斎の喪礼の講義を題材にして行い、近世儒教の宗教性を示す具体的な例として提示する。それによって、単純に近世の儒教は非宗教的であったと結論づけることはできないことを明らかにすることが本論の目的である。

一　喪礼における「孝」のあらわれ

黙斎が喪礼の講義をした当時、上総の地では「方角ガワルイノ土地ガワルイノト云テ、下継ガヨイト云ユヘ、仮リ埋メニシテオクカラシテ、二代スキテモ葬レヌコトニモ至ル。」[4]とあるように、形ばかりの葬式さえ満足に行われない状況がままあった。特に黙斎が問題としたのは、遺体をできるだけ早く埋葬しようとする風潮である。「親ノ死タニ一時モ早ク埋タカル」[5]という薄情さは、孝に悖ること甚だしい、人倫の基礎をゆるがす兆しであると黙斎の目に映ったのである。黙斎は、以下の二点を喪礼における「孝」のあらわれとして特に重んじ、門人達に浸透させようと努める。

1三日の斂

三日の斂とは、死後三日目まで待って納棺する礼のことである。三日目という区切りは、蘇生の限界を示す。孝子たるもの、親との別れを惜しみ、その蘇生を決してあきらめない。死後二日目の遺体の衣を替える礼に際して、『家礼』には「未だ其の面を掩はず。蓋し、孝子、猶其の復た生くるを俟ち、時に其の面を見んと欲するなり」[6]とあるが、黙斎は、孝子が、遺体が今蘇りはしないかという期待をもって、幾度も遺体の面をのぞきこむ行為こそ聖賢が高く評価するところであると注釈している[7]。

2治棺

治棺については、黙斎は、遺体を大切に保全するために棺のつくりを丁寧にすることを強調する。黙斎は棺を隠居処にたとえて次のように述べる。

治棺コレカ一チ大事ナリ。父母ガ隠居処ヲ立ル、ソレデ孝、不孝ガ知レル。（中略）棺ハ死タサキノ隠居所ナリ。生キタウチノ隠居所ハ修覆モナルガ、棺ノ隠居所ハトリカヘシナラヌ。（中略）喪ニハ棺ノ丁寧ヨリ外ハナイ。

（「黙斎先生　家礼抄略」、喪礼）

「喪ニハ棺ノ丁寧ヨリ外ハナイ」。棺は亡くなってからの隠居所であるから、それを丁寧に作るかどうかで、孝、不孝がわかる。「黙斎先生　家礼抄略」には、棺には油杉を用いること、瀝青を塗ることなど、遺体を保全するための数々の工夫が記されている。

こうして喪礼において親へ最後の愛敬を尽くすのであるが、その愛敬の行為の基底にあるのが「孝」である。

二　「孝」

1「孝」の本質―一体感

加地氏は、宗教的「孝」を「永遠の生命の連続の自覚」と規定するが、黙斎の「孝」はより生々しい、親の身とこの身が一体であるという感覚である。黙斎は次のように述べる。

孝ト云フコトハ、此ノ骸、親ニ貰ウタト云フカラ本ヅク。コレガ天理ノ実ナリ。

（「孝経刊誤講義」三表）

孝といわれる行為のもとにあるのは「此の骸、親に貰うた」という自覚であると黙斎は考える。さらに、敷衍して、「孝」は次のように表現される。

腰ヲモムノ、ヨク養フノト云フハ、孝ノワザノ一ツダ。此ノ骸ベッタリト親ノモノダト云フガ、孝行ノウマミハコヽニアルコトゾ。親ハ死ンデモ、親ハカラダノ上ニアル。一寸ソコナフハ親ヲ毀フチャ。ソコデミヨ。孝ガ人ノ性デ仁ニアタル。滋味親切ノ味ト云フガ茲ゾ。親ニカラダヲモラウタト云フ。ソコノアンバイカラ大フ仁ヘユク。

「腰ヲモムノ、ヨク養フノト云フハ、孝ノワザノ一ツ」にすぎない。「孝行ノウマミ」は「此の骸ベッタリト親ノモノ」、「親ハ死ンデモ、親ハカラダノ上ニアル」という自覚にある。親の身体とこの身が一体である。親はこの身の中に生きている、そういう意識こそが、「孝」のもとなのだと黙斎は述べる。

黙斎の「孝」を一言で言えば、親の身とこの身が一体であるという感覚である。加地氏が述べる「生命の連続」という概念化されたものではなく、端的に身が一体であるという感覚、それを「孝」という。

（「孝経刊誤合纂」四表）

2「孝」の諸相

①一体感の時間的拡大

親の身との一体感を時間的に拡大して未来へ向けてとらえれば、子孫の形骸の中にこの身が消えることなく残ると考えられることになり、また、過去の先祖へ向けてとらえれば、そこに祖先を祭る祭祀が成立する。

i子孫の中にこの身は残る。

黙斎は、「天地ヒラケテカラヲ、我続グコト」[8]と述べて、天地開闢以来の身をこの身が負っていることを強く意識するよう促す。

日本テハ神代、唐テハ万古氏。先祖アリテ、ソレカラコレ迄ツヽイタコトナリ。今吾昏礼スレハ、コレカラ又、天地アランカキリツヽクコト。ソレ故、コノ昏礼ホト大切ナコトハナイ。

（「黙斎先生　家礼抄略」、昏礼）

現在のこの身は、神代から連綿と続いてきた身を負っているのであり、それはまた、子を生むことによって「天地アランカキリ」つづいていく。

さらに、次の文章では、より明確に身体は「子々孫々ナクナラヌ」と述べられている。

コノカラダヲツグコト、六十万石モナクナルガ、カラタハ子々孫々ナクナラヌ。「カラタハ子々孫々ナクナラヌ」。子々孫々とは直系の子孫ばかりでなく、兄弟、従兄弟の血筋をも含む。そうした血筋の中に身は残ってなくならないという観念が黙斎にあった。黙斎は独身をとおしたので、直系の子孫はなく、しかも、兄の息子は事情があって家を嗣ぐことができなかった。さらに従兄弟の家の息子達も相次いで亡くなって、直系の血筋は絶えそうになる。しかし、晩年、本家の子を従兄弟の家の養子にしようという話がまとまりかけた時、自分の血筋が絶えることはないと考えた黙斎は非常に喜んで、次のように言ったと記録されている。

「ソレナレバ辱シ。某シ、モハヤ世ノ中ニ思ヒ置クコトナシ。今コロリトナツテモ、遺恨ハナイ」トテ大ニ喜ベリ。

（「再旬紀行」）

養子を迎えて、自分の血筋が絶えることなければ、身が永遠に続いていく。そうなれば、もはやこの世に思いのこすことはない。「今コロリロナツテモ、遺恨ハナイ」。死後の世界、他界を想定するのではなく、あくまでも、この世に生きる子孫の形骸の中に、身は存在し続けると黙斎は考えていた。

ii祖先祭祀

黙斎は、身のつながりを自分から親へ、祖父へとたどっていけば、神代にまで至ると考える。その身の一体感の上に霊的な響き合いが想定され、そこに祭祀が成立する。

カラタノ本ハ親。親ノ本ハ祖父。ソレヨリタン〳〵伊弉諾伊弉冊ノ世ノ遠ヘ響ク。今コチテ思ヤレハ、長崎ヘモカヨフ。ソコテ古今ヘ響ク。

（「黙斎先生　家礼抄略」、序）

長崎のような遠く離れた地にあっても思いが通じあうように、古今の隔たりを

超えた霊的な響き合いがあると黙斎は説く。

祖先との一体感から生じる霊的な響き合いについては、喪礼の講義の中で、よい葬地を慎重に選ぶよう奨励している部分に次のようにあらわれる。

地カ美ナレハ神霊カ安ク、子孫カ盛ナ筈。根カヨケレハ葉ノヨイテ験ガミヘル。悪地ヘ葬テハ、先祖カ安セス。然レハ子孫カ危ヒ筈ナリ。

（「黙斎先生　家礼抄略」、喪礼）

埋葬された祖先と子孫の間には強いつながりがある。よい土地に葬られれば神霊は安く、それは即ち一気によって先祖と通じている子孫が栄えることを意味する。先祖を悪い土地に葬ってしまっては、先祖が安らうことができない。それは子孫が危険な不安定な状態に陥ることを意味する。祖先祭祀は身の一体感である「孝」を霊的に確認する祭祀であるということができる。

このように「孝」という一体感が時間的に拡大されれば、この身は古今から未来へと「天地アランカキリ」つづいていくことになる。この無限に「つづいていく」という観念は、何に由来するものなのであろうか。

③「つづいていく」という観念

i 天

「つづいていく」という観念の背景にあるのは、天である。天について黙斎は次のように述べている。

看ヨ、天ハ萬古カハラズ流行シ、達者ニメグラルヽ。

（「姫島講義」、四裏）

天は一時も滞ることなく「萬古カハラズ流行シ、達者ニメグラルヽ」。古今変わらず、休まずに、天地にゆきわたる運動を続ける、それが天である。この運動を黙斎は庭の筍の生長に見る。

庭前ノ筍、最モ看ルニ好シ。快ナルカナ。一日、一日ニ似テ長じ、一刻一刻ニ似テ長ズ。

（「童蒙訓」、一二〇六頁）

日に日に、刻一刻伸び成長していく筍の姿を黙斎が快いと感じるのは、それが常に「カハラズ流行シ、達者ニメグラルヽ」という天徳そのままの姿だからである。天徳に従って生長を続ける草木と、天徳に反して刷新を拒む人を黙斎は次のように対照してとらえる。

四時代謝ス。（中略）草木天徳ニ従ツテ生長ス。人頑然トシテ新ナラズ。哀シムベキカナ。

（「童蒙訓」、一二〇六頁）

四季のめぐりは、常に新しいものが古いものにとってかわるという形で続き、草木は天徳に従って刻一刻生長していく。それなのに、人だけは頑なに新しくされることがないと黙斎は嘆く。

つまり、天とは日々、一刻一刻新たに刷新しつづける。刷新することによって無限に続いていく力である。天地が四季のめぐりを繰り返すのも、草木が芽吹き、生長しては枯れ、また新しく芽吹くという運動を繰り返してつづいていくのも、この天という無限に刷新を続ける力の運動なのである。

天地開闢以来、生まれ、成長し、死ぬことを繰り返しつつ、人の身が連綿と続き、なお未来へと続いていくと考える、その「つづく」という観念は「萬古カハラズ流行シ、達者ニメグラルヽ」という天の無窮の力の運動に由来する。

ii 死

死もまた天によって意味づけられる。天は一時も滞ることなく、流れるように運動を繰り返す。たとえ死のように静止していると見える状態があっても、それは運動の一部である。あくまでも動きがやんでいる状態であると黙斎は考える。

川ノ上デ逝ク者ハ斯クノ如シトバカリ思フ。死物モヤハリ逝クナリ。天地ガユク。ソノ中ニヲルモノハ皆逝ク。キタトキノ客、モフカヘルトキノ客ハ、ハヤソレダケ年ガヨリタノナリ。天地ハ動ナリ。静ハ動之息ムナリ。静ヲ見テモ動ト云ユ。ユカヌヲモユクト云」

（「話録」、二五裏）

「天地ガユク」、「天地ハ動ナリ」。天地は動いてやまない。変化し、刷新してやまない。「死物」もその運動の一こまである。「静」も「動」の一部と考えられている。人の個々の死は、天の生々の運動の中でとらえられたとき、死ではなく、むしろ日に日に刷新される積極的な運動のひとこまとしてとらえられる。極端な言い方をすれば、死はなく生が充満し、しかもそれは常に新しくされていく。

私達が常識的に考える死は生命力が尽きた状態、あるいは運動が停止した状態であるが、黙斎の考えでは、尽きるということ、あるいは停止するということがない。天の運動は無窮であり、静と見える状態があっても、それは、次の運動のはじまりであると考えられる。

加地氏は単純に「生命の連続」と述べるが、黙斎の例によれば、ただ漫然とのっぺりと続いていくのではなく、ひとこまひとこま、天地の生々の気を受けて刷新されながら続いていく。刷新するということによって無限に続いくということである。

三　黙斎の「孝」の特色

1「孝」の位置づけ

黙斎においては、「孝」という一体感が仁をはじめとする徳の理解の基礎になっている。「孝」は黙斎の儒教の重要な基礎をなす感覚なのである。次の文章から「孝」と仁の関係を知ることができる。

腰ヲモムノ、ヨク養フノト云フハ、孝ノワザノ一ツダ。此ノ骸ベッタリト親ノモノダト云フガ、孝行ノウマミハコヽニアルコトゾ。親ハ死ンデモ、親ハカラダノ上ニアル。一寸ソコナフハ親ヲ毀フヂャ。ソコデミヨ。孝ガ人ノ性デ仁ニアタル。滋味親切ノ味ト云フガ茲ゾ。親ニカラダヲモラウタト云フ。ソコノアンバイカラ大フ仁ヘユク。

（「孝経刊誤合纂」四表）

「親ニカラダヲモラウタ」という「滋味親切ノ味」から「仁」につながっていく。仁の基礎には親に身体をもらったという「孝」がある。

「滋味親切」の味とは、闇斎学派の常套句で、心身をとおして感覚的にとらえられる仁を表現する時の言葉である。身に生まれついてしみじみと感覚されるもの、それが仁であり、その身とともに生まれついているというとらえ方の基礎をなしているのが「孝」ということになる。仁は、この身を親からもらったという「孝」の自覚の上に、この身において感覚されるものなのである。

このことを、黙斎は生みの親が「仁義礼智」の取り次ぎをしたと表現している。

立レ身行レ道（中略）立レ身ハ明二明徳一、行レ道ハ新民ナリ。立レ身ト父母ニ受ケタ此ノ骸、只大事ニスルバカリデナク、天理ナリニ建立スルコト。親ガ仁義礼智ノ取次ヲシテ渡シタガ、ソレヲ本ノモノニミガキ立テ、ソレヲ家カラ国天下ニ及スガ行レ道ナリ。

（同、四表）

「仁義礼智」は親によって、この身体に生み付けられたものである。つまり、徳や道徳的な行為はみな親の身との一体感からはじまる。「此の骸べったりと親のもの」、「親は死んでも、親はからだの上にある」。この一体感が「孝」であり、その一体感の上で、仁義礼智という性がとらえられている。「孝」は黙斎の儒教の最も根本的な基礎を成す。

2天の性格

天という限りなく刷新し続ける力。それが「つづいていく」という観念を生んでいることを先に見た。「孝」の背景には天という力がある。天は力であって、人格的なものではない。もし、天が人格的な性格をもっているならば、その人格的なものに対する信仰が成立する。しかし、黙斎の天は力である。したがって、天を対象

化して信仰するのではなく、人も天という無窮の運動を続ける力の中にある、その運動とともに刷新をつづけていくという形になる。

四　結論

以上、黙斎の「孝」について考察してきた。黙斎の「孝」は親の身との一体感ということであった。それが、未来に向けて拡大されては、この身が消え去ることなく子孫の中に残るということになり、過去に向けて拡大されれば、霊的な響き合いによる祖先祭祀が成立する。黙斎は、天地開闢以来の身が、今この自分まで続き、そしてこれからも果てしなく続いていくと説いた。

この「つづいていく」という観念は、天という、無限に刷新し続ける力の上に成立したものであった。

黙斎の「孝」の宗教的要素とは何かと問われれば、天という超越的な力の運動を背景に、身が限りなく続いていくという観念が成立している点、また身の一体感を霊的に確認する祖先祭祀という祭祀がある点の二点をあげることができる。こうした宗教的要素を含む黙斎の「孝」を提示することによって、近世の儒教を単純に非宗教的と結論づけることはできないことが明らかになった。

おわりに

黙斎の「孝」をみることによって、初めに紹介した加地氏の一般的な「孝」の規定が個々の儒者によって、どのような具体的な様相をあらわすか、そのヴァリエーションを示すことができた。黙斎の「孝」の身をもってする生々しい感覚や、天の生々の運動が背景にある点は、如何にも闇斎学派らしい特色をあらわしており、宗教的な「孝」が闇斎学派においてはどのようにあらわれるかを示す一例となっている。

引用文献

・引用に際して便宜上、表記を改め、句読点を加えた部分がある。

『家礼』、慶應義塾大学図書館蔵の刊本。元禄丁丑（十年）浅見安正の識がある。
稲葉黙斎「姫島講義」、『道学遺書初集巻一　孤松全稿巻之一』（道学協会、明治二四年）。
「黙斎先生　家礼抄略」、無窮会平沼文庫蔵。
「童蒙訓」、『東金市史（史料篇三）』（東金市役所、昭和五五年）所収。
「再旬紀行」、千葉県立文書館蔵。
「孝経刊誤講義」、内田周平『孝経刊誤合纂』（谷門精舎、昭和一一年）所収。
「話録」、『道学遺書初集巻四　孤松全稿巻之四』（道学協会、明治二四年）所収。
加地伸行「『孝経啓蒙』の諸問題」、山井湧他校注『中江藤樹』（岩波書店、一九七四年）所収。
『儒教とは何か』（中央公論社、一九九〇年）。
『沈黙の宗教―儒教』（筑摩書房、一九九四年）。

註

(1) 加地伸行『沈黙の宗教―儒教』六二頁、六九頁。同『儒教とは何か』一九頁、二一頁をまとめた。

(2) 池田秀三氏も『自然宗教の力』（岩波書店、一九九八年）、一二二頁で同様の指摘をしている。

(3)「『孝経啓蒙』の諸問題」、四二五頁―四二六頁。

(4)「黙斎先生　家礼抄略」、喪礼。

(5) 同右。

(6)『家礼』喪礼六裏。

(7)「黙斎先生　家礼抄略」、喪礼。

(8)「黙斎先生　家礼抄略」、昏礼。